

# 関東大震災（1923年）からの復興と 第12回オリンピック東京大会（1940年）招致に関する研究

—「復興五輪」の歴史的検討—

大林 太郎\*

## 抄録

スポーツは、震災復興にどのような役割を果たすのか。2011年の東日本大震災以降、この問いは、日本のスポーツ界における重要な課題となっている。本研究は、この現代的な課題に対する新たなアプローチとして、過去の史実に立ち返り、関東大震災後の東京市における第12回オリンピック競技大会の招致の過程で「震災復興」がいかに語られていたかを明らかにするものである。

史料収集および分析の結果を以下に示す。

- 1) 1931年10月28日、東京市会は松永東、島名健、寺部頼助、増田知治雄、八太茂の五氏より提出された「オリンピック大会東京市開催に関する建議案」を満場一致で可決した。その文面には「復興成れる我が東京市に於て第十二回国際オリンピック競技大会を開催する」ことを希望する旨の記載が確認された。
- 2) 1932年6月10日、永田秀次郎東京市長は時の外務大臣齋藤實に対し、オリンピックの招致活動に関する協力依頼の上申書を提出した。その中には「本市に於ては既に復興事業完成し市域拡張も決定して大都市たるの施設を進め居る今日第十二回国際オリンピック競技大会は是非之を当地に於いて開催せらるることを熱望」していると記されていた。
- 3) 国際オリンピック委員会（IOC）のOlympic Studies Centreに保管されている招致アルバム（1933年～1935年）では、オリンピックに立候補に関する永田市長の序文、東京市で開催する際の意義と課題が英文で記載されており、とくに関東大震災を契機とした都市の近代化、そしてスポーツ都市としての環境整備に関する内容が写真とともに明示されていた。

このことから、すでに戦前の日本では、オリンピックムーブメントと震災復興が深く関連していたことが明らかになった。歴史的な研究の特性上、現在への政策的提言は差し控えるが、2020年の「復興五輪」の有意義な実現に向けて、本研究の成果が議論の材料として広く活用されることを期待したい。

キーワード：帝都復興、東京市役所、嘉納治五郎、永田秀次郎、国際オリンピック委員会（IOC）

---

\* 国立大学法人筑波大学体育系 〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1 体育系棟 B502

# The Recovery from the Great Kanto Earthquake of 1923 and Bids for the XII Olympic Games in Tokyo

—Historical study of “Fukko Gorin”—

Taro Obayashi\*

## Abstract

The Great Kanto Earthquake of 1923 striking Tokyo city was one of the largest scale disasters in the history of Japan. This paper aims to explore how Tokyo city appealed the “Disaster recovery” at the bids for the XII Olympic Games by analyzing historical documents. The findings are as follows.

- 1) On 28<sup>th</sup> October 1931, Tokyo City Assembly adopted the proposal regarding the bids for Olympic Games in Tokyo city. At the proposal, it is mentioned that Tokyo city, completely recovered, sought to bid the Olympic Games in 1940.
- 2) On 10<sup>th</sup> June 1932, Tokyo city Mayor Nagata Hidejiro sent the statement to Foreign Minister Makoto Saito. The statement included the sentence of that Tokyo city hoped to welcome the Olympic Games as the Imperial Capital Reconstruction Project was completed.
- 3) The albums, preserved and owned by IOC Olympic Studies Centre, included the preface of Mayor Nagata, the meanings and challenges of Tokyo city for the Games, especially on the modernization of the city and newly built sport facilities.

Even in the 1930s, the early period of sport in Japan, it is clarified that the Olympic movement and disaster recovery (after the Great Kanto Earthquake) were deeply related.

Key Words : Disaster Recovery, Tokyo City, Jigoro Kano, Hidejiro Nagata,  
International Olympic Committee

---

\* University of Tsukuba, Faculty of Health and Sport Sciences. Address: 1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8574 Japan.

## 1. はじめに

スポーツは、震災復興にどのような役割を果たすのか。2011年の東日本大震災以降、この問いは、日本のスポーツ界における重要な課題となっている。復興庁や被災自治体の復興計画にスポーツの推進が明記され、「復興五輪」と銘打つ2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催が迫る中で、体育学・スポーツ科学には専門知に基づく学術的な提言が求められている。すでに多様なアプローチで調査・研究が進められているが、震災復興とスポーツに関する統合的な知の形成に向けて、過去に立ち返り、人々が刻み続けてきた歴史から手掛かりを得ることも重要な作業であろう。

さて、地震大国とも称される日本は、これまで幾度となく災害に見舞われてきた。中でも1923年9月に発生したM7.9の関東大地震は、大規模な揺れと火災によって首都圏に甚大な被害をもたらした。有史以来の大災害として語り継がれている。また、震災後の6年半にわたる「帝都復興事業」は、後藤新平の構想による歴史的偉業として各分野で研究され、今日の復興庁の創設と各施策に多様な示唆を与えている。

さて、これまで日本体育史の研究では、この関東大地震後の復興期にあたる大正後期から昭和初期を「戦前における、スポーツ全盛の時代」（今村，1970）と評してきた。これは、第一次大戦後の世界情勢の中で、国民の体力向上やナショナリズムの高揚を意識した政府がスポーツの統制、国策化を推進したことによるもので、中でも震災翌年にあたる1924（大正13）年の明治神宮競技大会の創始（内務省）や全国体育大会の実施（文部省）などは、わが国におけるスポーツ政策の端緒的動向として位置づけられている（竹之下，1950；木下，1970；成田，1988；入江，1991；坂上，1998）。

また、それは東京市においても同様で、1921（大正10）年に設置された社会教育課が「市民体育ニ関スル事項」を分掌し、運動競技会の実施や市民体操の制定、普及などを展開していたことが明らかにされており（森川，1996）、同市の復興過程では「慰安運動会」（1923年11月）や「帝都復興記念体育大会」（1930年3月）が実施されたことも判明している（Obayashi and Sanada，2017）。

そして、関東大地震後の「帝都復興」は、1940（昭和15）年の「幻の東京オリンピック」にも紐付けられている。吉見（1998）は「あくまで仮説的」としながら、この招致が「震災から復興した「帝都」の繁栄を

世界にアピールしていこうと考える東京市の動きのなかで進められていた」と示し、それは「帝都の復興を祝った復興祭の延長線上に位置づけられている」と指摘した。また石坂（2009）は、1931（昭和6）年の東京市会における招致決議案の文面から、「関東大震災によって壊滅的な打撃を被った東京市の復興を記念して、オリンピックに白羽の矢が立った」と述べている。

そこで本稿では、これらの認識を実証的に明らかにすべく、1940年の「幻の東京オリンピック」の招致理念に「関東大震災からの復興」がどのように記述されていたかを確認する。これまで、主に日本の「皇紀二千六百年」を祝す記念行事との関連で論じてきた先行研究（中村，1985；波多野，2004；S. Collins，2007など）に学びつつ、関係史料の調査・再検証を行い、関東大震災からの復興という新たな文脈において、戦前の日本における「復興五輪」の歴史を読み解くための手掛かりを得たい。

## 2. 目的

以上の背景をふまえ、本研究は、第12回オリンピック東京大会（1940年）の招致理念の中で、関東大震災（1923年）からの復興がどのように語られていたかを明らかにすることを目的とする。

具体的には、1）東京市会（議会）におけるオリンピック招致に関する資料、2）日本とIOCの間で取り交わされた関係資料等を収集・分析し、戦前の東京市における関東大震災からの復興とオリンピック招致の関係性を史料実証的に明らかにする。

## 3. 方法

本研究は、歴史学的手法を用い、文献史料の収集とその批判的検討により遂行される。

とくに、1）東京市会におけるオリンピック招致に関する文献については、国立国会図書館、国立公文書館、東京都公文書館、外務省外交史料館、東京都立中央図書館、市政専門図書館（公益財団法人後藤・安田記念東京都市研究所）、そして各大学附属図書館等において史料収集を行う。

また、2）日本側と国際オリンピック委員会（IOC）の間で取り交わされた関係資料等は、IOCがスイス・ローザンヌに設置、運営するThe Olympic Studies Centreを訪問し、関係者との情報交換を通して、史料収集を行う。

そして、それら史料を時系列に沿って整理しつつ、オリンピック招致過程の史実と照らし合わせながら、関連する記述を分析、検討する。

## 4. 結果及び考察

本研究の結果を、以下の通り整理する。まず 4.1. では、東京市会におけるオリンピック招致に関する文献を分析した結果を示す。次に 4.2. では、日本（東京市）が IOC に提出した 1940 年のオリンピック招致のアルバム（1933～1935 年版）について精査した内容を記述する。

そして 4.3. では、IOC の Olympic Studies Centre での現地調査で入手した、嘉納治五郎が関東大震災後にクーベルタンに宛てたとみられる書簡を研究資料として紹介する。なお、各史料を直接引用する際には、旧仮名遣いを現代仮名遣いに改めて記述する。

### 4. 1. 東京市のオリンピック招致に関する文献

「第十二回オリンピック東京大会東京市報告書」（東京市役所、1939）によれば、招致運動の発端は 1930 年 6 月、当時の東京市長永田秀次郎と、日本学生陸上競技連盟会長を務めていた山本忠興が、皇紀二千六百年にあたる 1940 年を記念する行事としてオリンピックの東京開催を検討したことであった。

その翌年にあたる 1931 年 10 月 28 日、東京市会は松永東、島名健、寺部頼助、増田知治雄、八太茂の五氏より提出された「オリンピック大会東京市開催に関する建議案」を満場一致で可決した。以下にその原文を引用する（東京市役所、1939）。

#### 国際オリンピック競技大会開催に関する建議

第十二回国際オリンピック競技大会を我が東京市に於て開催し得る様理事者に於て適当なる処置を講ぜられたし。

#### 理由

従来国際オリンピック競技大会は各国主要都市に於て開催せられたるも未だ曾て東洋に於て開催せられたることなし。復興成れる我が東京市に於て第十二回国際オリンピック競技大会を開催することは我国のスポーツが世界的水準に到達しつつあるに際し時恰も開国二千六百年に当り之を記念すると共に、国民体育上裨益する所少なからざるべく延ては帝都の繁栄を招来するものと確信す。（下線：筆者）

ここでは、「復興成れる我が東京市」という記載を確認することができる。東京市がこの建議の前年にあたる 1930 年 3 月に「帝都復興祭」を開催し、一連の復興事業の完成を記念した経緯を考慮すると、オリンピック招致の機運が高まる背景に関東大震災からの復興が含まれていたことは十分に推察されよう。

建議案の提出に名を連ねた市会議員の寺部頼助は、その著書『オリムピックを東京へ』（1934）の中で、永田秀次郎市長自ら関東大震災から復興した東京市の実状を各国に説明する必要があると説いている。

そしてその永田は 1932 年 6 月 10 日、時の外務大臣齋藤實に対し、次頁に示す内容の通り、オリンピックの招致活動に関する協力依頼の上申書を提出した。

そこでは、オリンピックの開催が皇紀二千六百年の記念となることや、国民体育振興のための有益な機会となるという理由とともに、「本市に於ては既に復興事業完成し市域拡張も決定して大都市たるの施設を進め居る今日第十二回国際オリンピック競技大会は是非之を当地に於いて開催せらるることを熱望」していると記されている。この記述は、先述の東京市会における建議の内容と重なり、大震災から立ち返った東京市がオリンピックの開催を契機として世界に「大都市」としてのアピールを企図していたことが示唆されるものである。

### 4. 2. 日本（東京市）が IOC に提出した 1940 年のオリンピック招致に関するアルバム（1933～1935 年版）

次に、1933 年に東京市が IOC に提出した史料を確認する。当時、東京市の秘書課員を務めた清水照男によれば、1940 年大会の招致過程で「昭和九年の IOC アテネ総会に際しては東京のスポーツ並に文化施設を宣伝紹介するために「スポーツセンター・オブ・ザ・オリエン」<sup>1</sup>という写真帖を作」ったと述懐されている（清水・弘田、1958）。

その写真帖と思しき史料が、IOC の Olympic Studies Centre の「各都市の立候補ファイル」の書棚に保管されていた（1933 年～1935 年版）。1933 年版では、オリンピックに立候補に関する永田市長の序文にはじまり、東京市で開催する際の意義と課題が英文で記載されるとともに、皇居や国会議事堂、公園や繁華街、そして競技施設やスポーツに勤しむ市民の姿が写し出されている。1934 年版、1935 年版でも大要は同じである。

同写真帖について、真田（2017）は「日本は満州国問題により国際連盟脱退を表明、世界の孤児になりつつあった」が、このような折に「永田市長は東洋での初開催を希望するとともに、オリンピックムーブメントへ貢献することを掲げている。スポーツの分野では、世界とのつながりを深めようとしていた」と解説している。それでは、この写真帖において、関東大震災はどのように描かれ、その後の都市の復興過程はいかに記述されていたのであろうか。以下に抜粋する。

トテ諒解セシメラレ其ノ他之カ實現ニ  
 圖シ盡カテ賜ルコトヲ得ハ幸甚ニ候  
 珠、今夏米國「ロスアンゼルス」ニ於テ  
 開カレヘキ第十回「オリンピック」大會ニハ  
 「オリシピック」委員ヲ始メ各國ヨリ多數  
 有力者參集致スヘクニ付其ノ機會ニ於  
 テハ在米國大使及在「ロスアンゼルス」領事  
 各位ノ格別ナル御配慮ヲ煩度希望ニ  
 堪ヘス候何卒此ノ儀宜敷御取計被下  
 度尚將來本件實現ノ爲何令ノ御援助

昭和七年六月十日  
 東京市長 永田秀次郎  
 外務大臣子爵齋藤實閣下  
 追テ御参考ノ爲「オリシピック」委員名簿  
 添付致置候

秘發第二九一號  
 拜啓愈々清撰奉慶賀候然者國際「オ  
 リシピック」競技大會ノ義ハ從來歐  
 米都市ニ於テノ「開催」ニ居候儀  
 未ル西曆千九百四十年ニ催セル「第  
 十二回大會」ハ時恰モ我々「開國」ニ千  
 六百年ニ相當致候同大會ヲ我々  
 「開國」ニ於テ「開催」スルコトハ之カ絶好ノ記  
 念タルヘキ「ミナ」ス國人民體育ニ裨益  
 スル所斯カラス且又海外人士ヲシテ本邦

對スル理解ト同心トフ一層深カラシム  
 ルノ機會トモ相成ヘク今ヤ我々「開  
 國」ノ「歐米」列強ト覇ヲ争ハムトシテ  
 「オリシピック」時ニ際シ極メテ意義深キコト  
 ナルノ時ニ際シ極メテ意義深キコト  
 ト存候本市ニ於テハ既ニ復興事業  
 完成シ市域擴張モ決定シテ著々大都  
 市タルノ施設ヲ進メ居ル今「第十二  
 回國際「オリシピック」競技大會」ハ是「開國」  
 「當」地ニ於テ開催セラレルコトヲ熱望致  
 居リ候東京市會ハ昨年十月滿場一致

右第十二回大會ヲ帝都ニ開催スルノ希  
 望ヲ決議シ又市商工會議所體育團  
 体ノ關係者等モ皆著レク其ノ實現ヲ  
 熱望致居リ全國民ノ意獨亦同シタル  
 ハ想像ニ難カラス候然ルニ右開催ニ付  
 テハ既ニ他ニ有カナル競争團アリ且當  
 地カ歐米ヨリ隔リ居ル等ノ關係上其ノ  
 實現ニハ頗ル困難ヲ認メラルルカ故ニ  
 政府當局ヲ始メ各方面ノ協力ト海外  
 諸國ノ同情トヲ必要トスル次第有之候

特ニ開催地決定ノ權限ヲ有スル「オリシ  
 ピック」委員ニ對シ我々國民ノ熱意ヲ示シ  
 其ノ同情ヲ喚起スルコト最モ緊要ニシテ  
 其ノ爲ニハ直接各委員ノ諒解ヲ求ムルハ  
 勿論各委員所屬國ノ有カナル方面ヲ通  
 レテ該委員ヲ動かスコト甚ク重要ト  
 存候就テハ閣下ノ御高配ニ依リ各  
 國駐在ノ我々大使公使各位ニ於テ通  
 當ノ機會アル毎ニ之等ノ人々ニ對シ  
 第十二回大會ニ「開スル」當方ノ希望ト懇談

1932年6月10日付 東京市長永田秀次郎ヨリ 外務大臣子爵齋藤實宛て書簡  
 (中川隆編 (2009) 近代オリンピック競技大会資料集成 第三卷 pp.2-7 より引用)



Tokyo Sports Center of the Orient 1934年版 (標題紙)

... From those small beginnings the progress of Japan and of its capital was steady and rapid until 1923, when, at 11:58 o'clock on the morning of September 1, an earthquake started fires in more than 130 places and resulted in the destruction of more than half of the city. ...

(中略)

After every great fire it is the custom to say that the calamity was not unmixed with blessings. In the case of Tokyo this was literally true. At that time of the conflagration the city fathers were studying a comprehensive plan for the beautification of the city, for widening its streets, for improving the character of its buildings, public and otherwise. Then, the earthquake taught valuable lessons. It showed that modern structures of reinforced concrete were practically immune to the shocks. Thus, while the embers were still smouldering, orders were issued to make sure that the rebuilt Tokyo would be more beautiful and a safer place. The citizens were told that, in certain districts, they could have permits to construct temporary buildings only. Later, new streets lines were established and permanent building permits were issued. In some sections only buildings of structural steel and reinforced concrete were only permitted. The city spent more than ¥700,000,000, some of it directly, most of it in whose land was taken to widen streets and improve the city. The result is that the Tokyo of 1933 is a city with wide streets and with many small areas enclosed in squares of concrete buildings, so that no fire in the future will be able to sweep the metropolis from end to end as did that of 1923.

以上の抜粋部分について、真田 (2017) の編著書より日本語訳を引用する。

日本の首都の発展は、1923年までは着実かつ急速に進んだ。だが、この年の9月1日の午前11時58分、地震が発生し、130か所以上で火災が起り、東京の半分以上が破壊された。

(中略)

大火災の後は常に、災厄の中にも神の恵みはあるということがよく言われる。東京に関して言えば、これは文字通り真実だった。大火災当時、行政担当者たちは、街の美化、道幅の拡充、建築物や公共物その他の特性の改良を狙いとした都市基本計画を策定していた。そのようなとき、地震は価値ある教訓をもたらした。それは鉄筋コンクリートによる近代建築は実際に衝撃に強いことを示した。このようにして、火災の残り火がまだくすぶる中、復興後の東京をより美しく、安全な場所にするための指示が出された。市民は、特定の区域においては暫定的な建物のみ、建設を許可された。その後、新たな道路が作られ、恒久的な建物の建設が許可された。東京は、7億円以上を費やし、一部は直接、一部は助成金や、道路の拡充や町の改良のために私有地を接収された所有者への補償金という形で支払われた。その結果が、広い道路が走り、コンクリートの建物で四角く区切られた沢山の小さな区域から成る1933年の東京である。この先、この大都市が端から端まで火災に燃えつくされるようなことはないだろう。

このように、東京市はIOCに対し、関東大震災から復興した都市の特徴を説明している。紙面の都合上全てを引用することはできないが、上記の部分の他にも明治神宮外苑競技場(1924年完成)をはじめとするスポーツ関連施設や三大復興公園等が写真とともに紹介されており、震災復興の過程でスポーツ都市としての環境が整備されたことが示されている。このことは、戦前における日本のオリンピックムーブメントが、関東大震災からの復興と深い関わりを有していたことを示しているだろう。

#### 4. 3. 震災後に嘉納がクーベルタンに宛てた書簡

最後に、本調査の過程で入手した関連史料を紹介したい。これは、1924年2月3日付けで嘉納治五郎からクーベルタンに宛てられたとみられる書簡である。以下にその内容の一部を抜粋する。

Tokyo, Feb. 3<sup>rd</sup>, 1924

Dear Baron de Coubertin,

It is a long time since I wrote to you last. I have often been thinking of you and our colleagues, but my pressing duties, many and various, and my travelling round all parts of Japan from time to time have made me remiss in writing.

I thank you very much for your kind letter, inquiring after my safety at the time of the recent earthquake. As I have answered you by telegram, although my house and villas in the vicinity of Tokyo suffered some damages, yet fortunately my family and I were all safe. I was at that time travelling in Saghalien and came back to Tokyo after six days, experiencing many hardships on the way. My family was also at our villa far from the capital, where the quake was only slightly felt. Several of my relatives, however, lost their lives and many had their houses either destroyed or burnt. But we must bear these calamities when we remember the devastations in Tokyo, of which almost all the best part was burnt down, and where tens of thousands of people were killed in one spot. Cities like Yokohama, Yokosuka, and Odawara were almost wholly demolished.

(中略)

Regretting my inability to join the coming Olympiad, I remain, yours very sincerely,

Jigoro Kano

ここでは、震災後にクーベルタンが嘉納の安否を気遣う手紙を送っていたことや、嘉納は地震発生時に樺太にいたこと、そして関係者の中には命を落としたり家を失ったりした者がいたことを伝えている様子が読み取れる。クーベルタンと個人的な関係を築いていた嘉納の状況を知る貴重な資料である。

## 5. まとめ

本研究では、1940年の「幻の東京オリンピック」の招致理念に「関東大震災からの復興」がどのように記述されたかを確認すべく、主に東京市会の資料と市がIOCに提出した招致アルバムを分析した。

その結果、招致活動の初期段階では、その根拠に震災復興に関する文言が含まれていたことや、1933年～1935年にかけて作成された招致アルバムでは、震災を契機とした東京の近代化が語られていたことが実証

的に解明された。このことから、すでに戦前の日本では、オリンピックムーブメントと震災復興が深く関連していたことが結論付けられる。

歴史学的な研究の特性上、現在への政策的提言は差し控えるが、2020年の「復興五輪」の有意義な実現に向けて、本研究の成果が議論の材料として広く活用されることを期待し、結びとしたい。

## 【参考文献】

- 石坂友司 (2009) 東京オリンピックのインパクト—スポーツ空間と都市空間の変容. 幻の東京オリンピックとその時代 (坂上康博・高岡裕之編著). 96-124. 青弓社.
- 今村嘉雄 (1970) 日本体育史. 不昧堂出版.
- 入江克己 (1991) 昭和スポーツ史論—明治神宮競技大会と国民精神総動員運動. 不昧堂出版.
- Obayashi and Sanada (2017) Recovery from the Great Kanto Earthquake of 1923 Through Sport Events in Tokyo, Japan. *The International Journal of the History of Sport*, 33 (14) : 1640-1651.
- 木下秀明 (1970) スポーツの近代日本史. 杏林書院.
- 坂上康博 (1998) 権力装置としてのスポーツ—帝国日本の国家戦略. 講談社.
- 真田久 (2017) 東洋のスポーツの中心地 東京—1940年幻の東京オリンピック招致アルバム—. 極東書店.
- Sandra Collins (2007) *The 1940 Tokyo Games: The Missing Olympics*. Routledge.
- 清水照男・弘田親輔 (1958) 東京オリンピック談義 (対談). *観光* (38) : 22-27.
- 竹之下休蔵 (1950) 体育五十年. 時事通信社.
- 東京市役所 (1939) 第十二回オリンピック東京大会東京市報告書. (日本図書センターによる復刻版)
- 中村哲夫 (1985) 第12回オリンピック東京大会研究序説 (I). 三重大学教育学部研究紀要. *人文・社会科学* 36 : 101-112.
- 成田十次郎 (1988) スポーツと教育の歴史. 不昧堂出版.
- 波多野勝 (2004) 東京オリンピックへの遙かな道: 招致活動の軌跡 1930-1964. 草思社.
- 森川貞夫 (1996) 市民スポーツの擡頭. 東京都教育史 通史編三. 947-953. 東京都立教育研究所.
- 吉見俊哉 (1998) 幻の東京オリンピックをめぐる. 戦時期日本のメディアイベント. 19-35, 世界思想社.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。